

丘の上から世界につながり、芸術があふれる蘇南高校であれ

校長 小川幸司

はじめに

今日で令和4年度の授業日が終わります。2年生の皆さん、1年生の皆さんともに、この一年間で大きく成長したと私は感心しています。これならば、きっと4月からさらに充実した高校生活をおくることができるでしょう。安心して4月を迎えてくださいね。

先週のことですが、私が尊敬している南木曾町のある方が、こう話しかけてくれました。

「私が南木曾町に移住してきた頃、蘇南高校で講演をしました。そのときの第一印象は、ここの生徒たちはどうしてこんなに自分に自信をもっていないのだろう、ということでした。でも、今は総合探究発表会で見る生徒の皆さんが、本当に堂々としていて、楽しそうで、何か魔法がかかっているように見えます。素敵です。」

皆さんは、自分ではあまり気づいていないかもしれませんが、まわりの大人たちは、蘇南高校の3年間でそう見てくださっているのです。

1. 3年ぶりのカナダ語学研修

3月5日から14日まで、2年生の12名がカナダ語学研修に行ってきました。3年ぶりの短期留学の実施でした。

8泊10日のバンクーバーでの短期留学は、カナダ人の家庭にホームステイをし、語学学校でのレッスンや現地の学校との交流など、英語のシャワーを浴びる日々でした。何を言われているのかチンプンカンプンのところから始めて、留学の最後の頃になると、相手の言葉が理解できるようになってきました。素晴らしい進歩です。

そして多様な民族から構成されているカナダでは、お互いが本当に尊重されて暮らしていることを、つぶさに見てきました。

留学から帰ってきたときに降り立った南木曾駅の風景は、一見すると前と同じ風景のようであるが、この南木曾の外にはもっと大きな世界が広がっている——そのような世界の中の南木曾の風景だ——というように、少し違ったものとして心に映ったはずなのです。留学をした皆さんは、今回の経験をいかして最後の1年間の高校生活を、一層積極的に挑戦する日々にしてほしいと期待しています。

そして今回は留学しなかった皆さんも、きっといつかは海外に行く機会があるでしょう。せっかくこの世界の中で生きているのですから、世界の人々と語り合わないのは、もったいないです。是非、世界のことを学び続けて、いつかは世界に旅立ってくださいね。

ちなみに私は、初めての海外渡航は大学3年生の時、夏休みの1カ月を使ってヨーロッパの東半分を一周しました。ロシア・ウクライナ・ルーマニア・ブルガリア・ボスニア・クロアチア・オーストリア・ハンガリーをまわりました。教員になってからは、イ

ギリス・ドイツ・チェコ・オーストリア・韓国・中国・台湾・インドネシアなどをめぐってきました。万里の長城の上を歩いたり、シルクロードの砂漠のなかを旅したりしたこともあります。

私はいつも目の前の事柄を、世界の人々と比較しています。日本では当たり前のことが実は世界のなかではとっても素晴らしいことだったり——たとえば定刻に列車がやって来るとのこと——、日本人が世界一だと思っていることが意外とそうでもなかったりすること——たとえば日本人は勤勉だから経済的に豊かになったと思っていること——が、しばしばあります。

私は、自分の中にいくつもの「ものさし」を持つように心がけています。世界とつながることで「ものさし」を複数持つと面白いですよ！ ……このことを皆さんに呼びかけます。

一つだけ予告をすると、今年の6月に私は本を出版する予定です。岩波書店から『世界史とは何か』というタイトルで高校生から大人まで読めるような本を出すことを目指しています。すでに原稿用紙約 360 枚の分量を書き上げて提出しており、これから校正作業をします。いくつもの「ものさし」をもって世界史を眺めると、こんなふうに違って見えてくるよということを書きました。

2 芸術の魅力①——汝窯のフォルム

さて、私は自分の考えていることを日本全国の人々に伝えたくて本を書いているわけですが、何かを人々に伝えるときに「ことば」で伝えることには限界があるとも思っています。「ことば」以外に伝える方法があるのかと皆さんは疑問に思うでしょう。ありますよ。たとえば、音楽とか美術などの芸術がそうです。

音楽についてはすぐにイメージできると思うので、今日は美術（絵画とか彫刻、工芸など）の話をしていきます。

私が世界で最も好きな陶磁器が台湾の故宮博物院にあります。私は二度、この作品を見るために台湾に行きました。小ぶりで何の模様もない、薄青色の器です。中国の宋という時代に芸術をこよなく愛した徽宗という皇帝がおり、その時代の汝窯という窯で作られた器です。徽宗は芸術にのめりこみすぎて政治をおろそかにしてしまい、隣国の女真人に攻め込まれて捕虜になってしまいました。中国が戦乱に巻き込まれたため、汝窯の作品の多くは失われました。「蓮花式温碗」は、現存する数少ない一品です。雨がやんで雲の間から青空が見えてきたとき、徽宗が「あの色を汝窯で再現せよ」を命じたという逸話が伝えられています。

何がすばらしいかというと、このフォルムのラインです。実物を前にすると、心を奪われてしまいます。この器の前に何時間も立って見ている人もいるほどなのです。今の自分には無理だと思っているキミ、故宮博物院のホームページでは、3Dで「蓮花式温碗」を鑑賞できるようになっているのですよ。実演してみますね。

3 芸術の魅力②——ポルトンスキーの空間表現

もうひとつ、インスタレーションを紹介しましょう。空間そのものを美術作品にする手法です。

この分野で世界的に有名なのが、クリスチャン・ボルタンスキー（1944～2021）です。彼は、フランスのユダヤ系の家に生まれました。母はキリスト教徒でしたが、父はユダヤ教徒であったため、ナチス・ドイツがフランスを占領したとき、家の床下に1年半もの間、隠れ続けて生き延びることができました。ボルタンスキーは、ナチス・ドイツが膨大なユダヤ人を虐殺したホロコーストを記憶に留めておくために、ホロコーストそのものをテーマにしたインスタレーションを創作しました。

このおそろしい歴史的な事件をどうしたら芸術にできると思いますか。

ボルタンスキーに「カナダ」という作品があります。写真を見てください。閉ざされた空間の壁にたくさんの服を架けて、ナチス・ドイツが殺害したユダヤ人のかなしみの大きさを表現したのです。当時、貨物列車に乗せられて強制収容所に到着したユダヤ人は来ていた服をすべて脱がされて囚人服に着替えさせられました。その奪った服を置いておく部屋が、「カナダ」と呼ばれていました。ユダヤ人たちは、戦争のない幸せな国、カナダに行きたいという思いを込めてそう呼んだのです。この無数の服で表現されたユダヤ人のかなしみの表現は、芸術だからこそできることだと思いませんか。

もうひとつ「No Man's Land（無人地帯）」という作品を観ましょう。これはボルタンスキーが日本で作ったインスタレーションです。新潟県の美術館の中庭に3トンもの古着が敷き詰められています。中央の山ではクレーンが古着をつかみ、古着はこぼれ落ちていきます。ユダヤ人の死体の山であり、クレーンはナチス・ドイツの暴力の象徴のように見えます。しかしボルタンスキーはこう言っています。——当時、ユダヤ人を救おうと戦ったり、かくまったりした人間もいました。しかし彼らはユダヤ人全員を救えたわけではありません。誰かを助けようとするれば、別の誰かが見捨てられたのです。そうした人間の悲しい姿を表現したかった・・・そうボルタンスキーはインタビューに答えています。

「ことば」も大切ですが、私たちはこのような芸術作品と出会ったとき、感動や衝撃を心の中に刻むのです。芸術の迫力ですね。

4 芸術の魅力③——勝野眞言さんの「流されない自分作り」

ここで視点を蘇南高校に移します。本校の前庭には、彫刻家の勝野眞言さんの「律」というブロンズ像がおかれています。やや下をうつむいて、静かに自分自身のことを見つめている女性の姿です。自分を深く見つめることで自律している女性の凛とした姿が表現されています。すばらしい作品です。

私は、卒業式の式辞で、戦前のソ連で無実の罪で逮捕され、強制収容所を生きのびて、この南木曾に戻ってきて学校をつくらうとした勝野金政さんの生涯を紹介しました。実は、勝野眞言さんのお父様が、勝野金政さんなのです。

勝野眞言さんは、現在、熊本市にある崇城大学芸術学部の学部長をおつとめです。そしてフィンランドや日本各地で作品展を開催してきました。そして令和元年度の日展で文部科学大臣賞を受賞されています。まさに現代日本を代表する彫刻家です。

勝野さんは熊本で「土」から立体を創造することにこだわっています。「土」は大地です。私たちは大地の上で日々生きているのですが、実はその大地がどれほどすばらしいものであるかを自覚せずに生きています。勝野さんはまず「土」を徹底的に研究します。どうすればこの「土」の魅力を最大限活かすことができるのか、電気釜で焼いたり、もみ殻で野焼きをしてみたりします。そして自分だけではなく、そこに暮らす子

どもたちに「土」のすばらしさを知ってもらい、一緒に芸術作品を作り上げる活動をしています。実は、昨年、南木曾こども園で園児たちに土をこねて立体造形を作り上げる指導をしてくださり、そのついでに久しぶりに母校蘇南高校を訪れてくれました。

勝野さんが「土」から創り上げた作品を今日はふたつ紹介しましょう。まず、「江・I」というテラコッタ（素焼き）です。「律」の少女が成長して、もっとたくさんのことを内省しているような女性像だと思いませんか。

そして「音」というテラコッタです。かたひざをたてている男性は、いのちのリズムを発散させています。それは焼成したときの温度の差により窯変が起こったことでリズムが表現できるようになったのです。

勝野さんは、こう言います。

——自分の目で見えて判断して、流されない自分作りをしてゆくことができるのが、芸術だと思えます。

私はこの言葉にとても心動かされました。自分の目で見ること、流されない自分作りをすること……これは生きていくうえでとても大切なことだと思うからです。先ほどの「ものさし」の話に戻ると、いくつもの「ものさし」を持つとともに、自分自身が納得できるような、自分自身の「ものさし」を持つことの大切さです。

実は、この「江・I」と「音」の二つの作品について、勝野眞言さんが蘇南高校に展示して下さることになりました。何と！

私たちはすばらしい芸術作品とともに次の新年度を迎えることになります。勝野先生に心から感謝したいと思います。

そして、皆さんへの最後のメッセージです。

「丘の上から世界につながり、芸術があふれる蘇南高校」の生徒として、これからも「自分の目で見えて判断して、流されない自分作りをしてゆく」人間を目指してくださいね。

《参考文献》

勝野眞言『記憶の軌跡と出会うとき』（つなぎ美術館、2012年）

クリスチャン・ボルタンスキーほか、佐藤京子訳『クリスチャン・ボルタンスキーの可能な人生』（水声社、2010年）